



南阿蘇村立南阿蘇中学校 学校だより

ハーモニー



R4. 7. 8(金) No.13 小柳 弘志

社会を明るくする運動

毎年7月は“社会を明るくする運動”の強化月間及び再犯防止月間です。先日、南阿蘇村の保護司会を中心と

した10人の方が学校に啓発プリント等を持って来られました。

コロナ禍以前は、生徒会執行部と共に玄関前などで配られていたようですが、今はコロナ感染防止のために資料配付を学校に願う形になっているので生徒のみなさんと一緒にできないのが残念とおっしゃっていました。

しかし、今年は地域で活動している私たちの気持ちを生徒の皆さんに伝えたいということでしたので、校長室で生徒会執行部との会話の時間をもちました。自己紹介の後、保護司の活動内容や中学校生に期待することの話がありました。

いただいた資料の中には「薬物乱用は『ダメ。ゼッタイ。』』と書いてあるチラシがありました。心身ともに健康で安全な生活態度や習慣を形成すべき中学生時代に喫煙、飲酒、薬物の危険性について知ることは重要です。酒やタバコなどは未成年者の視点から見たゲートウェイドラッグとしても指摘されています。ご家庭でも話題にしてください。いただいたチラシ等は来週配付します。



「村営塾」の開校式がありました

7月4日(月)に、「村営塾」の開校式

がありました。この塾は熊本地震で南阿蘇村の交通網が寸断されて塾に行けない状況がうまれました。そんな中、南阿蘇中の3年生が夢を叶えられるように財政面や人材面で、村から支援をいただいて3年生の希望者に開かれている塾です。村営塾の趣旨と南阿蘇村の大人の人たちの思いをしっかりと理解して、参加の有無を決めてほしいと思います。

また、講師の先生方も地域の先輩が多く、力のある方ばかりです。まずは、自分で問題に挑戦し、分からないところがあれば自分から質問してください。村営塾であるのは数学と英語の2教科ですが、必ず他の教科にも、良い影響が表れます。村営塾は自主参加です。参加するのも参加しないのも自分の意思で決めることができます。自分自身の「夢実現」のために家庭のこと、応援してくれる人たちのことを考えて、参加するののかしないのか決めてください。



「受刑者の再スタートをつくる取り組み」

しんわ
真和中学校 2年

テレビや新聞から、今日も様々なニュースがあふれてくる。それは全国各地で起こった事件のニュースが大部分であり、どれも目を覆いたくなるようなものばかりだ。ある日の朝のこと、寝ぼけながらリビングのドアを開けると、ちょうど家族が朝食を食べているところだった。私も席に着き、何気なくテレビから流れているニュースを眺める。しかし次のニュースへと切り替わった時、私はその画面に釘付けになった。それは、熊本で起こった強盗事件の犯人が逮捕されたというニュースだった。飲食店に侵入して現金三万円を奪ったという男に対して「熊本で強盗とか、こわっ。刑務所から出てきても絶対再犯するよね。」私はそう呟いた。たった三万円のために罪を犯すなんてありえないことで、とても理解できないという感情でいっぱいだった。

そんな私が、この夏ある体験をした。それは母から勧められて受刑者の立ち直りについての番組を見たことだ。その番組は、自身も七年間服役していたことがあるという会社経営者の男性が、元受刑者が立ち直るための支援をするというドキュメンタリーだった。番組の中で紹介されることは、私がこれまで全く知らなかったことばかりだった。引受人がいない受刑者は、仕事も住む場所さえない状況で人生を再スタートさせねばならないということ。仕事をしようとしても、「元受刑者」という事実は隠すことができないため、職に就くことは難しいということ。まともに仕事ができず生活に困窮した彼らがたどる道は、生きるために再び窃盗や詐欺に手を染めていく道なのだという事だ。

さらに番組では、無職の元受刑者の再犯率は、有職の人の約三倍に及ぶと伝えていた。再犯が増えるということは、新たな被害者が増えるということだ。つまり、元受刑者を受け入れる社会にならない限りは、この恐ろしい負のスパイラルは増大するだけだということを示している。

この悪循環の中、再犯を防ぐ活動をしているのが、先ほど述べた会社経営の男性だ。彼の活動は、主に出身した元受刑者に積極的に講演を開き、時には大学生に向け、時には元受刑者の雇用を検討する事業主に向けて、元受刑者の立ち直りを支援することがいかに重要かを説いていた。

彼の話で、とても印象的な言葉があった。元受刑者の立ち直りに必要なのは何かと尋ねられたときに答えた言葉だ。「しっかり認めて、褒めて、信じてあげること。それだけです。何も難しいことはありません。」

「元受刑者は怖い」そう思っていた私の意識や考えは、この番組を見て、少し変わったように思う。もちろん、犯罪には被害者がいて、決してその罪は許されるものではない。しかし受刑者は、服役することで罪を償い、社会復帰に向け厚生を誓う。一方で、一度捕まった経験のある自分を受け入れてくれる人がいるだろうかとの先の見えない不安の中にある。その中で、「認めて、褒めて信じる」人の存在があれば、受刑者たちの立ち直るチャンスは見えてくる、私はそう思うようになっていた。

この番組を見たあと、受刑者が刑務作業で作った製品を購入できることを親から教えられた。そこで実際に、熊本刑務所の敷地内にある売店に連れて行ってもらうことにした。そこでは、革製品や布製品、石けんなど、店で販売している製品とは比べても全く遜色のない美しい製品が、安価で販売されていた。刑務作業は、受刑者の更生のために、勤労体験として行われるそうだが、一生懸命作らなければこんなに立派な製品はできないだろうと思う。もちろん受刑者と直接接したわけではないが、何となく、その前向きな姿勢のようなものを感じることでできた機会であった。

私は今まで、犯罪は恐ろしいもので罪を犯す人は悪い人であるという、曖昧で軽く、一方的な考えにとらわれていた。この番組を見たことをきっかけに、受刑者の今後について自分なりに考えることができたと思う。今の私には、元受刑者の方を助け、支えるような大きなことはできない。しかし、例えば身近に道を逸れそうな人がいたときに、理解して支えることならできるかもしれない。悪いことをしてしまった人を簡単に切り捨てるのではなく、その背景を理解して受容していく、その姿勢を持つことができるようになりたいと思う。